
于禁

風唄

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

于禁

【Nコード】

N3573B

【作者名】

風唄

【あらすじ】

約千八百年前、中国、後漢、三国時代の人、悲運の名将、于禁についての小説です。正史をベースに『基本的』に彼の行動は変えず書いています（もしかしたら演義も混ざっているかも知れませんが…）新しい于禁のイメージを持っていたければ幸いです。

第一章

世は乱れていた

天下には黄巾を目印とし、国家転覆を狙う黄巾賊が蔓延り

天下は各地で朝廷側と黄巾賊の戦が起こっていた

そんな中、ある青年が黄巾賊を討つべく、郡の義勇軍に志願する

姓は于、名は禁、字は文則

泰山郡の人、後に魏国の五將軍に数えられる人なり

私の指揮官は斉北の相、鮑信様であった

彼の家系は代々儒学者で彼自身も公平かつ寛大な心と節義をふまえ、
儒学にも秀で人格者であり、軍の皆は彼を慕っていた、

そうして、これ以降四十年近く続く、私の戦乱が始まった。

私は鮑信様に従い黄巾賊との戦に明け暮れた、
今日も戦、明日も戦、明後日も、明々後日も…

そうした戦乱の世も私は不思議と生き続けた、
仲間は櫛の歯が抜けるように、次々と死んでいった。

斬っても斬ってもきりはない

無理も無い、世は宦官（去勢された役人、皇帝の秘書官、多大な権力を持っていた）のせいで乱れ

虐げられた民衆はこぞって黄巾賊に身を投じたのだ、

私は無理も無い、と思う、

だが、それと乱を起こすのは別問題だ、

それに、単なる一兵卒の私が何をやろうと無意味である、

ただ、私には国を守る防人として防波堤に立つのみだ

だが、防波堤の内側は、何かのきっかけさえあれば、すぐにも潰れてしまいそうなほどに、脆かった。

そうしてある日、鮑信様に伝令が届いた、

黄巾賊の主導者張角の病死、弟の張宝、張梁の戦死

そうして、少し後にもう一つ

朝廷での権力争いにより大將軍何進の宦官による暗殺、それに伴う何進の部下袁紹、袁術の宦官虐殺

それを鮑信様は重く考え上洛なされた

それと同時に……

西方の雄、董卓の入洛

董卓の上洛は大きく時代を動かした、

日々、洛陽（首都）から噂が流れてきた、それらの多くは董卓の悪行、横暴を伝えるものであった、

皇帝、少帝の廃位させ、陳留王を皇帝にすげ替え、自身は相国を名乗り、権力を手中に収め、一族のものは誰彼構わず大名にした、と

また、反対したものは皆、処刑した、らしい

鮑信様は帰ってこられたが多くは語らなかった、

我々はまだ黄巾賊の残党と戦っていたが鮑信様は憂い、日々頭を悩ませていたらしい、と噂が流れた

そうして、もう一つ風の噂が流れた

董卓を暗殺しようとしたものがある、と

失敗はしたがその男は、故郷に帰り私財を投じ、義勇軍を編成したらしい、

その男の名は曹操

私は、強く惹かれた、一度あってみたい、そう、強く願うようになっていった、

そんな中吉報が齎された

…もしかしたら凶報だったのかもしれないが…

東郡太守の橋瑁が三公（役職名、高官、司徒、司空、太尉と言う三つの職）の公文書を持って群雄達に反董卓連盟を呼び掛けたのだ、

これには勿論鮑信様も参加した、そして各地の勇将名将が一同に集った、

そこには、名門袁家の袁紹、袁術など、各地の群雄が集まった、そこには…あの…曹操もいた、

盟主には三代に渡り三公を排出している名門袁家の袁紹が選ばれた。

戦の準備は整った、
兵糧、武器、兵力、

この世の全てを集めたようだ、

そして、大軍で、また、多くの将を擁し、指揮系統が複雑な故、少しずつ、ゆっくりであったが董卓のいる、洛陽に進んでいった、

おまけに各群雄はお互いを信用しておらず、全くの烏合の衆である、

と董卓に皮肉られていた、らしい、

疑心暗鬼の群雄たちは動かない、

そんな中、活動している軍がいくつかあった、

一つは袁術配下の『江東の虎』孫堅

そして、もう一つに曹操軍、それに鮑信様も従った、無論私も、

孫堅軍は有能な将や多くの兵を失ったが、敵将華雄の首を上げ、勝利を納められた、

そのことに董卓は大いに慌て、孫堅に和睦の使者を送るも断られ、遂には首都、洛陽を焼き払い、歴代皇帝の墓を暴き宝物を奪い、反対した数千名を殺し、財産を奪い、民衆に移住を強制した、

しかし、それでも反董卓連盟は動かない、

反董卓連盟が動かぬことにごうを煮やした曹操軍…それに鮑信様も、董卓軍を追撃した、敵は民衆を引き連れ、足が遅いはずだった、

そこに、敵軍が現れた、

無論敵軍とて馬鹿ではない、迎撃の軍を用意していたのだ、

敵将は徐栄と言う将であった、

敵軍は明らかに我が方より多い、

それに敵将は私の目から見ても出来る、
いかに曹操様や鮑信様が勇戦しようと、名将相手では衆寡敵せず、

我が軍は大敗した、

鮑信様の弟君は討たれ、鮑信様も重傷を負われた、
曹操様も馬を失われ、曹操様の従弟の曹洪様の馬をいただき、何とか生き延びたと言う、

我が身が無事でいることが不思議なくらいの大敗であった、

氣息奄々反董卓連盟に帰ると、そこでは反董卓連盟の解散が決定していた、

董卓が洛陽を焼き払ったことにより、疑心暗鬼であった各群雄は、解散を決意したらしい、

何と言う愚かな者達だろうか、

何のための反董卓連盟だったのだろうか、

…ともかく、弱体化している我が軍だけでは董卓軍に対抗は出来ない、また、鮑信様も重傷を負われている、このため我が軍も帰ることとなった、

そのまま、領地に帰り暫くがたった、

董卓は養子で、飛將軍と称される呂布の裏切りにより、人生の幕を下ろした、

彼の死体の臍に蠟燭を立て、火をつけると三日間、燃え続けたと言う、

その呂布も董卓の将、李力クや郭シに敗れ、都を追われ、都は李力ク、郭シのものとなった、

そんなとき、反乱の一報が入った、
相手は黄巾賊の残党

反乱地は東郡を中心とし、既に郡太守は殺され、曹操様が推挙され、
反乱の鎮圧に向かったと言う、そして、鮑信様も曹操様に助力する
ため東郡に向かった、

鮑信様は曹操様と合流し、別動隊を指揮することとなった、

そこで事件が起こった、

我が軍が夜、陣を張り、休んでいると何処からウォー、と声が
聞こえた、

兵が外に出ると、そこには黄巾の布を巻いた集団が、囲んでいる、
明らかに敵軍、敵の数は不明ながらこちらの準備は出来ておらず明
らかに不利、

勝てる見込みは…無い、

兵の断末魔が絶えることは、無い、

おそらく殆どが我が方の兵だと思う、

私の目の前にも、敵兵が見える、

敵の槍が伸びる、

危ない、

槍が顔をかすめる、

何とか躲すことが出来た、

さあ反撃だ、とばかりに、私は近くに落ちていた槍を拾い、敵兵顔面に投げ付ける、

敵兵からザシュツ、と鈍い音がして、倒れた、

私は敵兵から急いで槍を抜き、敵陣突破を図った、幸い、敵兵の包囲は薄い、

槍を構え、真っ直ぐ敵陣を突破した、

奴らは私が攻撃してくるとは考えなかったのだろうか、

私が突っ込んでいくと薄い包囲網はあっさり破れた、

私はそのまま走っていったが、このまま走っていてもどうしようもない、と考え、決死の覚悟で、陣に向かっていった、

私が陣に着くと、そこには死体の山、

我が軍の兵は無傷のものは殆どおらず、将は全て、息絶えていた、

無論、鮑信様も、

息絶えていた

ここはどうしようもない…将はおらず、兵も少ない、それに鮑信様を失った兵は離散しようかと話していた、このままでは…この軍は無くなってしまう、

私は腹を決めた、

私は叫んだ

皆、鮑信様の大恩を忘れたか、

我々は鮑信様の意思を継ぎ、曹操様に助力すべきだ、

我々は曹操様の下に向かうべきだ、と叫んだ、

周りからは最初は小さく、そして徐々に大きな声で賛同者が集まり出した、

そして、発案者として私が指揮を取ることになり、我々は曹操様の下に向かった、

幸い、敵軍にはあわず、曹操様の下にたどり着いた、

私は曹操様と面会し状況を伝えた、

曹操様はとても、気に充ち溢れ、堂々たる人物であった

曹操様は酷く落ち込まれた様子ではあったが、明日、敵軍と決戦することを私に告げ、我々に休息を取るように命じられた、また、軍の臨時指揮官に私を任命なされた、

翌日、曹操様は敵軍と戦われた、

黄巾賊は百万ほどまで膨れ上がっていた、

勝敗は圧倒的だった、曹操様の手腕は見事、の一言に尽きた、彼に惚れ込むには時間はかからなかった、

翌日、黄巾賊は降伏を申し出た、

曹操様は快く申し出を受け入れ、その中から精兵三十万を選別し、彼等を青州兵と名付け、自軍に組み込んだ、

後の人々はこの出来事をこう呼んだと言う、

魏武（曹操のこと）の強、これより始まる、と

翌日、曹操様が私を訪ねられ、私の配下にならないか、と尋ねられた、

私は、勿論二つ返事で答えた、

第一章（後書き）

皆様、おそらくはじめましてm（――）mこの作品は最初は短篇として投稿予定でしたが（私にしては）異様に長くなりそうなので予定を変更して連載として投稿致します（今まで連載はあえて避けていたのですが…）連載は不定期になると思われますが最後まで御愛読いただければ幸いです。

第二章

あれから時が過ぎた、

私は軍司馬として一軍を率いていた、

曹操様は素晴らしいお方だ、読みが外れることはなく、どのような場合も冷静沈着、神算鬼謀、まさに鬼神の如きお方だ、

そのような中私も小さな戦でそれなりの上げていた、

そんな中事件が一つ、起こった、

曹操様は土地を固められ、隣接する徐州にお住みなさっている曹操様の御父上、曹嵩様をお呼びなさった、

曹嵩様は先祖代々からの蓄えを持ち、曹操様の下へ向かわれたのだが…

その際徐州刺史（徐州の知事みたいな役職）陶謙が曹操様に恩を売ろうとしたのだろうか、護衛隊をつけて下さったのだが、

あろうことが、その護衛隊の隊長が曹嵩様とその家族、従者を皆殺しにし、財産を奪い逃走したのだ、

当然のことながら曹操様は怒り狂われた、

そして護衛隊を送った陶謙の徐州に向かって進撃なされたのだ、これには私も同行した、

この際、曹操様は一つの命令を出された、

徐州の者は皆殺しにしろ、と

皆は…無論私も…忠実に従った、曹操様は法令を重視なさるお方だ、

この命令に、不満を持つもとは居たらしい、と聞いたが、結局、皆この命令に従い、徐州の者は老若男女とわず皆殺しにした、

その様は、民の遺体で、川がせき止められるほどであった、

ただ、殆どが、一方的な、虐殺であった、

敵の正規軍も居たようだが、それらの多くは、我が軍を見たらすぐに、逃げていった、

…無理もないだろう、

我が軍は殆ど一方的に陶謙がいると思われる、徐州（都市名）に向かつていった、

やがて、徐州城が見えて来た際、もう一つ、事件が起こった、

我々の本拠地で謀叛が起こったのだ、

首謀者は董卓を殺した飛將軍呂布、それに曹操様が信頼なさっていた陳留太守張バク、それに張バクの弟の張超、最後に、我が軍の参謀でもあった陳宮、

また、呂布軍の配下には高順や張遼など名だたる将が揃っていた、

呂布軍にあつと言う間に、我々の土地は、奪われていった、

……両面作戦など愚の骨頂だ、

頃よく、この時に陶謙軍に援軍に来ていた劉備と言う将から停戦を希望する使者が来た、

劉備…聞いたこと無い名だ、

背に腹は変えられない…

曹操様は陶謙、それに劉備に恩を売り退却することを決めた、

我々は直ちに呂布軍へと向かっていった、

第二章（後書き）

お読みいただきありがとうございます。m（――） m第二章でした、
まだまだ長いなあ… 大変だあ、因みに小説自体は一部脚色や資料が
無い部分等は推測もしてあります（します）が基本的に彼の動きは
同じです

第三章

呂布軍は強く賢かった、

多くの城が呂布軍に靡き、我が方に残った城は我が軍の参謀、荀イク、程イク、それに將軍夏侯惇が守っていた僅かに三城であった、

数十あった城が僅かに三城とは…

しかし、予想外の謀叛であり、完全に信賴していた張バクの謀叛、三城だけでも残っている分、上出来だろう、

もしこの三城が無ければ、我々は完全に帰還地を無くしていたのだ、

いくら兵があろうとも、土地が無ければ軍隊は消滅したも同然だ、

そして、すぐに我が軍は呂布軍との戦闘に入った、

我が軍は呂布軍と濮陽と言う城塞都市で開戦を迎えた、

濮陽には呂布軍が籠り容易には落とせず、また、臨機応変、神出鬼没な戦術により多大な被害を受けていた、

このままではまずい…そのような焦りが軍中に広まっていた、そんな中濮陽に住む田氏と言う富豪が曹操様に手紙を寄越した、

私が手引きするので濮陽にお入り下さい、と、

曹操様はこれに乗った、

そして決行の日、参謀の劉曄殿の進言を容れ、曹操様は軍を三つに分け、その一つを率いて曹操様は濮陽にお入りなされた、

私は待機軍に居た、

そして暫くすると、濮陽内から火の手が上がった、

騙された、

皆がそう思い、軍は曹操様救出に動き出した、

しかし城門は固く閉ざされ、全く開く気配はなく、おまけに矢は霰のように飛んでくる、

当然だ、今まで破れなかったからこのような作戦がなされたのだ、

皆の気持ちは焦る、が、気持ちばかりが前に行く、
どうにもできない、

そんな中、曹操様が現れた、

ほかの城門を通られたのだろう、

ただ、髪は縮れ、馬は無く徒歩であったが、

とにかく曹操様は生きていらした、

曹操様は矢継ぎ早に指揮をし、軍は一時撤退した、

被害は…大きかった、

そして、次の作戦を協議しているとき、空が闇に覆われた、

…蝗だ、

蝗はここいら一帯、全ての食べ物を食い尽くした、

我が軍も、無論呂布軍も例外無く、食糧は無くなった、

呂布軍は食糧を求め、去っていった、

残ったのは、荒廃した土地であった、

戦は、謀らずとも、否応なしに、一時休戦となった、

第三章（後書き）

第三章でした、ありがとうございましたm（――）m…なんだか于禁と離れていきそうな感じです（汗）于禁…名将なんですけど比較的活躍が地味ですし（滝汗）

第四章

呂布軍は兵糧をさ迷いいずこかに去り、我が軍は麦を刈りに繰り出した、

我が軍は殆どが麦を刈りにでて、守備兵力は少なかった、
が、それも問題は無いはずだったが…

なんと呂布軍が曹操様の居城を攻めて来た、

我々の部隊は殆どが麦を刈りにでであり、無論、私も近くにはいなかった、

守備兵力は僅かに千以下、

絶体絶命である、

しかし、曹操様は慌てずに婦女子を城に立たせ、兵には敵兵に全力で当たることを命じた、

するとどうだろうか、

敵兵は兵が少ないのを見て、西の林に伏兵がいるのでは無いか、と警戒し、十里も兵を引いた、

敵は我が方が麦を刈りに出ていたことを知らないのか、
とにかく、一日凌いだだけでは敵兵が引くわけも無く、我が部隊も城には程遠かった、

翌日、呂布軍は曹操様の居城に迫る、

敵軍は西の林に伏兵がないのは確認したことだろう、

呂布や陳宮は曹操様の兵が少ないのを見てほくそ笑んでいることだろう、

だが、曹操様は上を行っていた、

今度は林に伏兵を置き、呂布軍を徹底的に打ち破り、本陣まで攻め寄せた、

その後も合流した兵力を使い、曹操様は呂布軍を徹底的に打ち破った、

奇襲、夜襲、伏兵、待ち伏せ、

この戦は類い稀な戦略家、曹操の名を世に知らしめる戦となった、

そして、我が軍は遂に本拠地であるエン州のほぼ全土を奪還するに至った、

土地を失った呂布は陶謙が病死し新たに徐州刺史となっていた劉備のもとへ落ち延びていった、

そして首謀者の一人である張バクは弟、張超に一族を連れ城に籠るように命じた、

我が軍は早々にこの城を打ち破り、曹操様は張バクらの三族を皆殺

しにした、

また、張バク自身も暫く後、使者として呂布軍から南の有力者、袁術へ行く際、部下の裏切りにあい、あえない最後を遂げた、

そして、一つの報があった、

長安で李カクや郭シの傀儡皇帝となっていた献帝が長安を脱出して、洛陽に逃れて来た、

曹操様はこれを直ちに迎え入れ、新たに許昌を都となされた、

そしてもう一つ、献帝を迎え入れた少し後になるのだが、

呂布が劉備を裏切り徐州を乗っ取り、劉備は我々を頼り、曹操様のもとへ落ち延びて来た、

賛否両論あったようだが…結局、曹操様はこれを受け入れた

今、もはや皇帝の権威は地に落ち、世は群雄割拠している、

東の徐州には呂布が虎視眈々と我が軍を狙っており、

北の河北には袁紹が北の雄、公孫サンを追いつめ、ゆうに天下の半分と言われる膨大な領地を得る寸前であり、

西には李カクと郭シが互いに争ってはいるが、莫大な兵力を有し、

さらに西の涼州には馬騰や韓遂と言う辺境の騎馬民族をも従える強敵があり、

南東には袁紹の異母兄弟、二袁と並び表された、肥沃な大地を持つ袁術がおり、

さらに先の江東に鬼神の如き進撃を見せ、古の勇将、項羽になぞらえられ、小霸王と呼ばれる孫堅が長男、孫策が圧倒的な勢いで領地を広げ、

すぐ南には董卓軍の生き残り、天下の奇才、奇策縦横の参謀を有す賈クを配下に持つ難敵、張繡が隙を見せるとすぐに攻め寄せる気配を見せ、

その先には張繡と同盟を結び、天下の要所、荊州刺史、劉表が広大で肥沃な領地、多大な人材、膨大な兵力を集め、

南西西の漢中には宗教の教祖、張魯が支配し、

遠く南西、益州の地には劉焉…そして劉璋が天下の要害を有する、

一体天下に平和はいつ訪れるのか…

それをわかる人物は、いない、

第五章

曹操様は戦の傷を癒すと共にほかの群雄が誰ひとりとして行っていないあることを始められた、

屯田（兵に田畑を作らせる）だ、

戦になると戦があつた場所は荒れる、

それは戦の直接の被害だけではなく、軍司令官の多くは略奪をするからだ、

兵糧が減つた場合の略奪は常識と化していた、

しかし、略奪は安定して兵糧は得られないし、住民の怨みもかう、それに、平時も大量の兵を無駄なく活用が出来る、

この時我が軍はほかの群雄の一步先を歩いていたと言っても過言では無いように思える、

戦の傷も癒え始め、献帝様を迎え入れ安定し始めた我々は、南の張繡を討伐することとなった、

近々、北の袁紹と戦になることは明白で、挟撃は避けねばならない、

張繡は名参謀、賈クを擁し劉表の支援を受けていた、

強敵だ、

曹操様はまず徐州の呂布に官職を授け手なずけておいて、張繡の討伐に向かった、

難敵と思われた張繡討伐戦はさほど苦勞せずに終焉を迎えた、

張繡軍は降伏した、

張繡は元々戦う気が薄かったのでは無いか、
そう思えた、

我々は張繡軍の本拠地の宛城に駐屯することになった、

そこで我々は戦後処理をしていた、
そんな中、曹操様は張繡の叔父で、張繡と劉表が戦っていた時に戦死した張済の未亡人、鄒氏を見初められ、

夜な夜な、密会を重ねられた、

それが面白く無いのが張繡である、
張繡は怒り心頭で、夜な夜なひそかに賈クとあっている、と情報があつたが、曹操様は既に張繡には力が無いと見たのか歯牙にもかけていない御様子、
私も特別行動を起こすとは思えず、賈クに愚痴を零しているのだろ
う、と言う程度しか思っていなかった、

だが、我々は張繡、ひいては賈クを甘く見ていた、

ある晩、張繡が軍を率いて夜襲をかけて来た、

これは完全なる奇襲となった、

完全なる敗北…この戦は曹操様の数少ない敗戦となった、

人的被害は言うにしれず、

また、将では曹操様の甥の曹安民様、

曹操様の嫡男の曹昂様は馬を無くされた曹操様のために馬を差し上げられ、戦死、

親衛隊長とも言える、典韋殿も曹操様を守って亡くなられた、
壮絶な最後であったと言う、

曹操様は典韋殿の死を深く悔やまれた、

だが、死人は生き返らない、

私も何とか百ほどの手勢を集めることができた、

我が軍は追撃を逃れるため許昌への撤退を開始することとなった、

第六章

張繡軍は苛烈、かつ慎重に敗走する我々を追撃する、

そんな中にも何とか私と私の手勢は多少敵と離れることが出来、一息つくことが出来た、

と言ってもそれは他の味方の犠牲の上に成り立っている極僅かな時間なのだが…

そんな大切な時間を無駄には出来ない、我々は直ちに防御の為、林間の道に塹壕を掘り始めた、

そして、前方から3、40人ほどの人が見える、部下たちの間に緊張が走る、まずい…まだ塹壕は6割ほどしか出来ていない…

と、心配したのもつかの間、前方の人は兵ではなく、村民の様子だ、それも女子供ばかり、

近くに村でもあるのだろうか…？

そんな疑問が頭をよぎる、

だがそれより先にもっと大きな疑問が残る、何故こちらに向かってくるのか、

その疑問はすぐに解消した、

村民の後ろには兵士が各々、弓や剣などを持って追い掛けている、
略奪か…

軍隊にはよくあることだ、

奴ら、もう勝った気でいるのだろう、

その緩み切った顔、泣きつ面に变えてやる、と私は意気込んだ、

見たところ、敵兵は3、40といったところだろうか、本隊が近く
にいることだろう…

まあ、いい…今は目の前の敵を殲滅に全神経を向けよう…例えこの
身朽ち果てようとも、敵本隊の一部でも縛り付ければ足止めには
充分だろう、

よし！と気合いを入れ、

弓兵前へ！と号令をかける、

敵は我々に気付いてはいないのだろうか、

それとも未完成とは言え、塹壕で見えにくいだけだろうか、

まあ、それならば好都合だ、

敵兵はどんどん近づいてくる、

ぼんやりとしか見えなかった兵士が漸くはっきりしてくる、

なにかがおかしい…

だがなにが…

その答えはすぐに出た、

目が良い兵士が叫ぶ、

あれは敵ではありません！

なにつ、

…よく目を凝らし、確認してみる、

む…確かにあの軍装は曹操軍の…それも青州兵（元青州の黄巾賊、曹操が討伐し配下に納めた）では無いか…

味方だとは…嘆かわしい…

日頃から青州兵は横暴に振る舞い、法令も無視して来た、

やはりこうなったか…

私は懸念が真実になってしまったことを嘆く、

そうしているうちにも青州兵と村民はこちらに向かっている、

どうするか…そんな迷いは一瞬、もはやあれは賊軍だ、

私は部下に、

賊軍を攻撃する、と宣言する、

部下に緊張が走った、

だが、気にはしてはいられない、

そろそろ賊の顔も見えることだ、

明らかにニヤニヤした顔付きだ、狩りの獲物でも追っているつもりだろうか…腹が立つ、

民に気を取られてこちらにも気付いていない様子だ、間抜けな…それとも我々を無視しているのだろうか、

すぐにも弓の射程距離に入るというのに…

とにかく、我々には有利だ、

そろそろか…

一つ大きく息を吐き、弓矢を取る、あと三歩、二歩、一歩…よし、今だとタイミングを計り立ち上がる、

私はその民たち、左右に退け、

と叫んだ、

民たちは一瞬何がなんだかわからないといった表情だったが、私が、早く、と叫ぶと左右に散って行った、

賊は、なにがなんだかわからないと言う感じであつた、
…まあ、自軍に攻撃されるのも思っていないだろう、

だがそれも、一瞬であつた、

私は民がいなくなったことを確認し、弓を目一杯引き、放つた、

矢はシュツと風を切り裂く音を放ち、先頭をいた賊の頭に命中し、
ゆっくりと倒れた、

…一瞬、極一瞬だけ、時が止まつた…ように感じた、

刹那、賊が悲鳴を上げ、雪崩を打つたように逃げ出した、

それとほぼ同時に、なにをしている弓兵、と私が叫んだ、

すぐにヒュン、ヒュンと矢が飛び始めた、

大多数には逃げられたが、これで充分だろう、と判断し、追撃はせず、塹壕作りを再会しようとする部下の一人から進言があつた、

青州兵はこのことを訴えでるはずで、早く殿に弁解しに行きましよう、と

だが、私は

殿は聡明な方だから信じはすまい、それより賊（張繡）は間近に迫っているのだ、早く戦に備えよ、と皆に聞こえるよう叫んだ、

部下はそれでも心配な様子であつたが、早くしろ、と一喝し、作業

を再開した、

塹壕を完成させ、目立たぬよう、賊の死体を左右の林に隠し、伏兵を左右に配置した、

そして暫くすると前方に土煙りが高々と上がった、

間違いなく敵騎兵の追撃だろう、

あの土煙りからして相当な速度、歩兵はいないだろう、

私は塹壕に配置した弓兵30に、用意、と小さく命令した、

塹壕には弓兵のみ、残りの槍を持っている兵と弓兵の一部は伏兵に配置した、敵がある程度近づくと我が方に気付いたのだろう、

敵将が何か叫んでいる、次の瞬間には矢が飛んでくる、だが遠い、ましてや相手は騎兵、命中率は期待できない、

冷静に相手を確認する、後ろは見えないが、おそらく敵は100程度だろうか、もしかしたら200ほどいるかもしれない、

はつきりとはわからないがその程度だと思う、

やはり歩兵はいないようだ、

あるいは遅れているだけかもしれないが直接の驚異では無い、

とにかく、いまは前の騎兵に集中すべきか…

そんな間にも敵は益々速度を上げ突撃してくる、

だが、その足が止まった、

先頭を走っていた馬、数馬が前つめりになり、兵が投げ出される、すぐ後ろの騎兵が倒れた馬にぶつかり、やはり落馬する、

成功した、

我々は簡単なものであったが落とし穴を作ったのだがそれが成功したようだ、

相手は混乱しているようだ、
勝機！

この混乱を逃すわけには行かない、

私は直ぐさま弓兵に弓を射るよう命を下し、私も弓を射る、

敵兵はバタバタと倒れるも、敵は我が方が少ないと見てか、攻撃をやめる気は無いようだ、

数に任せ突撃してくる、

だが、無理に攻めようとして、益々混乱している、

いける、

そう思ったのだが、報告があった、

矢が無い、と、

む…無理も無い…退却戦であつたから矢はあまり持つては来れなかつた、

仕方ない、次の手、だ、

次の手の為、合図を大声で叫ぶ、

左右から、おお、と叫び声を発し、伏兵が出て来る、

また、我々も剣を持って突撃する、

…敵は退却を始めたようだ、

よし、もういいだろう、

これ我々は追撃は行わず、戦後処理を手早く終わり、退却の準備にかかった、

その後も小さな戦を繰り返しつつ、許昌に退却した、

暫くのち、曹操様よりお呼びが掛かった、

例の青州兵のここのようだ、

真実はわかっている、とのことだったが何故私に訴えでなかったのか、と質問だった、

私が

殿は聡明な方だから信じないはずだ、それより戦に備えが大事だと判断した、と答えた、

曹操様はそなたの何事にも動じない節義は古の名将にも勝ると絶賛なさった、

そして、その功と、退却戦での功で私を益寿亭侯に封じられた、

時に西暦197年のことであつた。

第六章（後書き）

久方ぶりの更新となりますm（――）m申し訳ないです…どーも書くときは一気に書けるのですが書かないときは全く書けないもので（汗）

第七章

翌年、我々は徐州、下ヒで呂布軍を包囲した、

暫く膠着状態が続いたが水攻めをして暫くのち、敵将三名が敵参謀の陳宮を縛り降伏してきた、

そして、呂布も立て箆もって粘っていたが、諦めたのか我が軍に降伏し、徐州に久方ぶりの平穏が戻った、

そして、曹操様は客将、劉備殿などと相談なされ、呂布、陳宮、猛将高順などを斬首にされ、張遼殿を登用なさった、

そして曹操様が地盤固めをなさっている頃、北の袁紹が遂に公孫サンを破り北を統一し、中華全土の半分ほどの土地を手に入れられた、

そして、袁紹から兵糧などを借りたいと、とても横柄な文の手紙が届いた、

傍目から見ても、袁紹との対決は避けられないように思えた、

だが、出鼻をくじく事件が起こる、

劉備が後方の袁術を攻める、と曹操様から兵を借り討伐に向かったのだが、なんと劉備は新しい徐州刺史を殺害し、反乱を起こしたのだ、

なんと恩知らずな…

呂布に攻められ困っていた劉備を助けたのは我が殿だったと言っている……

おそらく劉備は袁紹に対するため、兵を動かせない、と読んだのだろうが、電光石火、我々は劉備を討伐し、敵将の関羽が我が方に降った、

また、宛の張繡と賈クも我が方に降ってきた、

殿は過去のことは水に流され、大いに喜ばれた、
また、袁紹の備えも着々と進めていった、

そして、決戦の時は来た、

仕掛けたのは袁紹、

袁紹は猛将顔良に我が方の城を攻めるように命じた、

守将は劉延と言う将、

よく知らない名だが敵は顔良、孔融殿が武の代表にも上げたほどの猛将、役不足は明らかだろう、

無論すぐに曹操様は救援の将を送られた、

先鋒に呂布軍の降将張遼と、劉備軍の降将、偏將軍に任命された関羽、

共に勇猛で名を馳せた将、

確實とは言い難いが充分対抗できるだろう、と思った、

だがそれは裏切られた、

関羽、張遼の両名はすぐに戻って来た、

… 顔良の首を手に、

話を聞くと関羽は顔良が近づいてくると一刀の元に斬り殺したという…

ただし、顔良は手紙を懷から取り出し関羽に話し掛けようとしていたという、

だが、油断していたのは同じだ、

戦場で敵將に話しかけるなど愚かな行為、だ、

何かわけがあるうとも…

死ぬか生きるか…それが戦場のはずだ、

…とにかく、顔良は散った、

だが、すぐに袁紹は新たな将、文醜を繰り出して来た、

文醜も孔融に顔良と共に武の代表として上げられている猛将、

それは我が軍本隊が前線に着いたとき、現れた、

まだ戦場に着いたばかりで陣地構築が出来ていない我々に文醜が騎兵隊を率い、急襲して来た、

我が軍は散々に打ち破られる、

ようなことにはならなかった、

呂布軍水攻めを献策した参謀の荀攸殿が瞬時の判断で輸送隊を圜に文醜を引き付けさせ、文醜が混乱した際、軍を率い攻め立て、見事文醜の首を挙げられた、

こうして袁紹は二人の大將を失った、それでも袁紹軍は引かず今度は袁紹自ら兵を率いてきた、

我が軍も応じるように軍を率い、官渡で河を挟み袁紹軍と対峙した、

私は最前線、延津の守備に志願し、延津の守備についた、

決戦は間近に迫る、

時に西暦200年のことである、

第八章

戦いは長期戦となった、

敵軍は我が軍の数倍とも、十数倍とも言われた、
事実、私が戦う敵も倒しても倒しても限が無い…

なんとかこの地は守り切っているとは言え…このままでは…

現在は互いに塹壕を掘り合い、知恵比べの様相をていしてきた、

塹壕を地下から攻めようと掘ると気付き、埋める、

敵が井蘭（移動式高み台みたいなもの）を作れば、我が軍は参謀の
劉曄殿が霹靂車（巨大投石器、霹靂「ヘキレキ」は雷の意味）と呼ば
れる兵器を作り、対抗する、

と、言った具合に時ばかりが過ぎ去って行つた、

この膠着状況を打ち破つたのは敵の許攸と言う参謀、

この参謀は画期的な兵器を発明したわけでは無い、

状況を打開できる策を袁紹に献策したわけでは無い、

ただ、我が軍に降伏して来た、

そうして、一つの策を曹操様に示した、

大軍を動かす際の一番のネックは…兵糧、

そして、袁紹軍は兵糧を烏巢と言う地に集積し、淳于瓊と言う将を配置しているらしい、

この淳于瓊と言う将、

この将は過去には曹操様や袁紹と同じ西園八校尉と言う皇帝の力を高める為、黄巾賊討伐で功を上げたものを集め、新設された近衛軍に選ばれている、

ただし、烏巢の防御は不完全で兵は多くはない模様だ、

勝機、

すぐに曹操様は夜襲を計画された、

この判断の冷静で素早い計画、実行、他の君主には真似出来まい…

そして実行の日、

曹操様は自ら少数の兵を率い烏巢を急襲し、淳于瓊は善戦虚しく楽進と言う将に捕らえられた、

また、返す刀で援軍の将、蒋奇をも斬り悠々と帰還なされた、無論袁紹も手を拱いて見ていたわけでは無い、

袁紹は高覽と張コウと言う将を差し向けて来た、

共に名将で名をしられた将で、顔良、文醜がない今、袁紹軍最強

と言っても良いのではないだろうか、

敵軍の攻撃は苛烈だった、

だがこれは想定済みの攻撃、充分の備えをし、大多数の兵を残している、

守り切れないはずはない、

やがて、敵兵の攻撃も衰え始め、降伏した、

その裏には敵参謀郭図の讒言があったという、

とにかく、我が軍はその後も攻撃を加え、敵は壊滅状態になり、袁紹は僅か800騎に守られ引いて行ったという、
最初は数十万兵があったと言っのに…

そして淳于瓊は曹操様の前に鼻を削がれ引き出された

曹操様が

どうしてこうなったのだ、

と聞くと

勝敗は天の定め、どうして聞くことがあるつか
と答えた

曹操様は降伏させたがっただけが許攸が

淳于瓊は鏡を見る度に憎悪が増すだろう、
と進言したため結局処刑された、

こうして、官渡の戦いは幕を降ろした、

だが、まだ袁紹は諦めないようだ、

なんとまた数十万の兵を率い、進軍し、黎陽と言う地で対峙したが…

鎧袖一触、我らが参謀、程イク殿の策、十面埋伏の計で敗退し、心労も重なり袁紹は病死した、

その後も袁紹が息子、袁譚、袁尚らが戦を挑むも後継者争いの隙をつき、あっという間に北は占領された、

袁紹の息子たちも遼東太守の公孫康の元に逃げたが、やがて公孫康は袁紹の息子たちの首を送ってきた、

ここに袁紹は滅び、北は我らがものになった、

これで、ゆうに天下の半分を得た、

また、私も功を認められ、偏將軍に任命された、

次に狙うは南の荊州の劉表、そして南東、江東の孫堅が息子で、孫策の弟、孫権の地だ、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3573b/>

于禁

2010年10月10日22時28分発行